

會稽三浦與言 三

~ 13
3114
3



會稽三浦與言

會稽三浦與言卷之三

利
岩附町
心

虚實論

浪速
高木よそ

浪松氏助

本著伊國屋
十四番地

林
野

斯て又九郎兵衛ハ十分の怒氣を發して寺子屋定右衛門を引
立帰らんとかけ出ると良人が國を越るやわつち縛らるるは女房ハ
忝いぞよ長吉源氏方の一大夏吾身の雜美と推量しての讀た
久よくも不美後者小は呉たる此科小て殺さるるは秋菊公の御
名も出と連判状の久くへつひも立身ぶ人も立まらざる偏小を
たの情ゆゑに拜したる思へともかく縛らるるて自由な心
拜んで居るらちおも一つの雜美の不美の相手身小
屋が雜題をのひ懸らるるも其供て堪忍も致さば其時ハ又

會稽三浦與言卷之三

自奉三河集卷之三

起清の淫義雜毛が跡へ戻り来ふ何とぞ情のうへの情の其のた
 物を其方口口して喰裂き捨て是はじかくのうらも心も移事
 ふ頼むと氣を苛ら額を膝小押も其の毛小おのて氣づき
 のふれ斯申某と源氏が安連藤九郎盛長とて佐殿小忠義
 を運ひ若輩の世の人の顔見知りぬを幸ひ小北家へ下見奉
 りと身をやつて入込居るも國の源氏浪人志のひく小尋不折
 くら町をづきの寺子屋定右門と名乗者を見まは三浦の二門岡
 山崎四郎殿の御内真田文藏國安といふ者少て究竟一の味方
 の便りも通て心を合せ置は安堵あまきと語ふ半へ門扉うせいく
 とくなく色無法者放さぬと迫り合捨合入来るは別人の
 真田文藏國安なり又九郎兵衛もも疾痺と盗入たまはく
 敷と通らぬ密夫をひらぬと半分の心も馬鹿な夢
 小も知らぬ疎勿心を云かけ今一言ぬりて見ると服差小字をか
 きハ又九郎兵衛もも恐まじとあつかなく倚り書と起清文女
 房めが落せを拾ひさつらだり澄據具を見よと以前の一通
 を文藏が白晷の先へ付まは不審ながら打泳り書白面を讀んく
 驚く駢何と是でも密夫せぬ返答あふは商人と上見うそい
 うつる系文藏の思安を正へ角あつら上く北定右門が一生
 懸命其方も亦男たまひ女房を盗きて一分立は是妻敵討
 て鬚憤を晴せよ殺し又汝を返り討小ふつら天井被て女
 夫小るん勝負は互の運次第と身賭ひてはく立を又九郎
 わき笑ひ能加減を淫を在るせ町人の密夫小五

起清の淫義雜毛が跡へ戻り来ふ何とぞ情のうへの情の其のた
 物を其方口口して喰裂き捨て是はじかくのうらも心も移事
 ふ頼むと氣を苛ら額を膝小押も其の毛小おのて氣づき
 のふれ斯申某と源氏が安連藤九郎盛長とて佐殿小忠義
 を運ひ若輩の世の人の顔見知りぬを幸ひ小北家へ下見奉
 りと身をやつて入込居るも國の源氏浪人志のひく小尋不折
 くら町をづきの寺子屋定右門と名乗者を見まは三浦の二門岡
 山崎四郎殿の御内真田文藏國安といふ者少て究竟一の味方
 の便りも通て心を合せ置は安堵あまきと語ふ半へ門扉うせいく
 とくなく色無法者放さぬと迫り合捨合入来るは別人の
 真田文藏國安なり又九郎兵衛もも疾痺と盗入たまはく
 敷と通らぬ密夫をひらぬと半分の心も馬鹿な夢
 小も知らぬ疎勿心を云かけ今一言ぬりて見ると服差小字をか
 きハ又九郎兵衛もも恐まじとあつかなく倚り書と起清文女
 房めが落せを拾ひさつらだり澄據具を見よと以前の一通
 を文藏が白晷の先へ付まは不審ながら打泳り書白面を讀んく
 驚く駢何と是でも密夫せぬ返答あふは商人と上見うそい
 うつる系文藏の思安を正へ角あつら上く北定右門が一生
 懸命其方も亦男たまひ女房を盗きて一分立は是妻敵討
 て鬚憤を晴せよ殺し又汝を返り討小ふつら天井被て女
 夫小るん勝負は互の運次第と身賭ひてはく立を又九郎
 わき笑ひ能加減を淫を在るせ町人の密夫小五

又九郎
兵衛
自殺
二番
三番
下ノ河

會私三浦島着之三



又九郎兵衛源家譜代の
因縁を語りて軍用
喜平次後家
金を文蔵

渡

安達盛長



又九郎兵衛

真田國安

益備を爰へ連うへじい白い黒いを紅や上密夫と白伏せ世誤
 つと澄文を書せ備が屋財家財を首代小取子折簡女房の
 持てうせも筆管首長持子道具残らひ具も首代小取て好あけ
 當世いそむぬ切刃廻そよるを早く誤り澄文書おんといつる相手
 小るふ氣れく一分捨ての無手性大欲心の魔王よ又九郎は信
 が支なり死文蔵入はて崗入は出民早夫と云るる取處も
 さに腐て根生首代まつて済そよといふも此方より九八せ
 立派小いひきまか武士の魂又九郎は信は威利と是非小一札書よ
 とて取を取とも思ふぬ強欲たわと小澄文望るといふにも書く
 つくさんと云るる早くとらると後たあかん平のころとく思たての
 眼をうらんとつけ小友久と無念小苦む高うめだ立あくる身

をりうく文蔵刀を抜もやらと大欲無通小澄文蔵の
 い魂も其を不義者と朝と死るん心の程心外おも又取は信
 子細を聞さん其為小とめいさぬ替しの内せつるもあへては
 寺子屋定右門と世を忍びた子飯屋の名其の誠の名は真
 田文蔵国安又とらるる藤九郎盛長とて兩人とも源氏譜代
 の忠臣とらるとのひつ二人が縄目切ると思ひもちた此一通又九
 郎を信る妻とまつて世を忍ぶる母子二人に誰人をもわと替ね
 らる取らるる殺る故太典既美朝公小御勘氣を象とる帽
 子折の大太郎と断人小成下じ八丁研喜平次が後家子共り澄文
 の御徳小て頼朝公小御目見へ申して此子が願ひ昔の武士の
 心を今一の功を立んため有徳と聞て又九郎其は良人小りのて

馴染をけけ軍用の金銀を借つて潤へんと思ふうち降て踊る
今日の次第悲しく親子の身のはつと叶ふぬのさういふ主君の所大
直まて露野せんうやうのんがうう悔しくおりの幾流の業を改む
小忍ひも寄らぬ人々源氏小由縁おらまは忠孝の臣下と聞か
しき初めて案堵おと伺小忍心の実義い面小あふたきたる

○軍用金

直の物語のふらふらひあふ程小深手小苦む又九郎兵衛此はしを
聞て起直り相其方八下研喜平次が後家の子供して有いら
断り又九郎兵衛こそ喜平次が父耶親るる権内とふふ者
其方が為小舅又大三郎は孫なるあふくと呼色小相といひ
金銀の不思議文蔵も盛長もあまきとて見合と顔とくふ又九郎

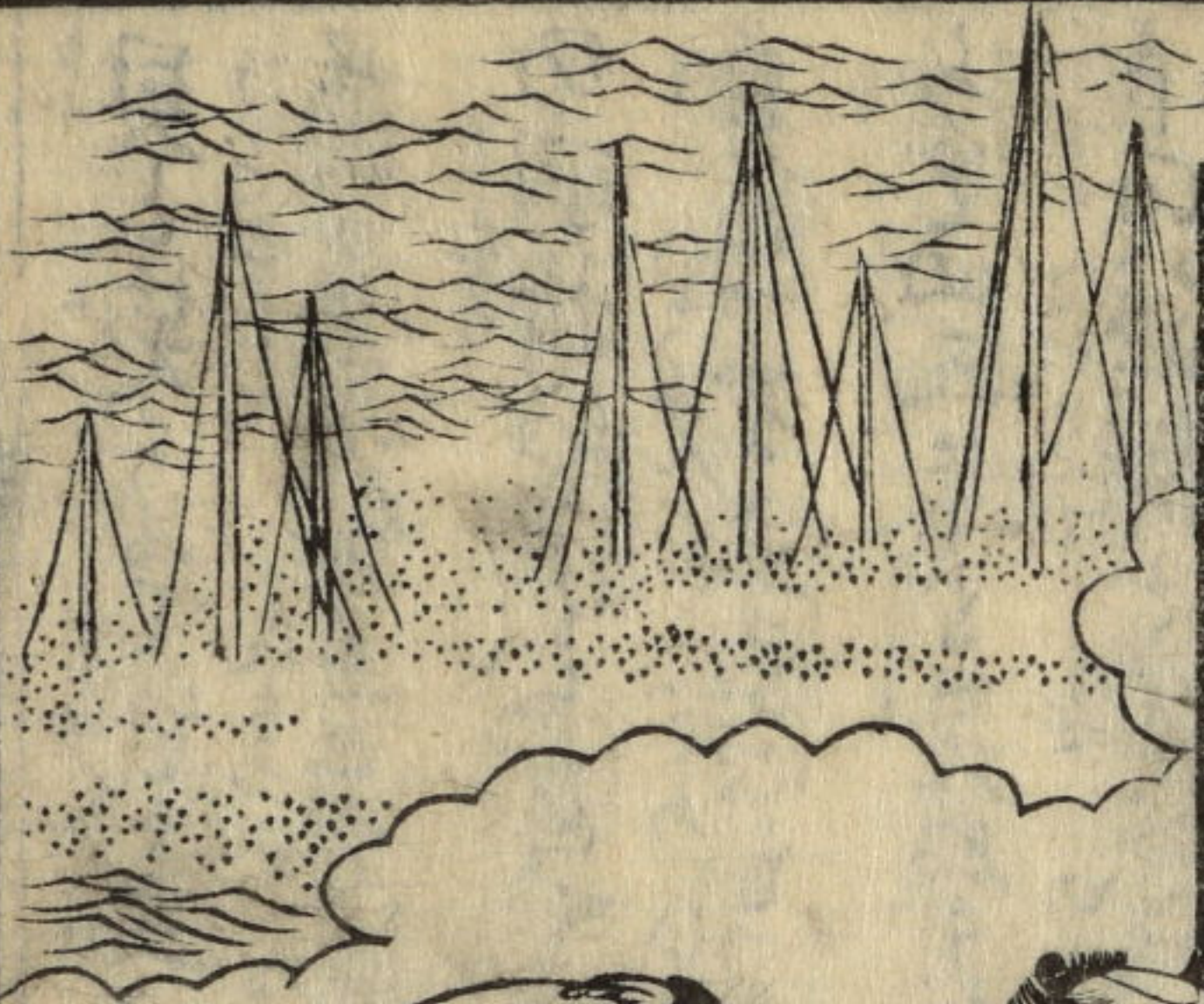
おらあつた何事りの不審おほいん最喜平次が親とて
申さぬとても武士の果その武士の身をりて一字も引ぬ
とふ似合さる疑はしに親呼るる不審顔は最るり后其の昔の
名八下研の権内とて先祖の代々無筆則無筆をいひ立小
二川の切米小身者御奉公の没るる源家十傳はる大支の言
物事毎の虫干役馬もあまきとて見合と顔とくふ又九郎
かて御書なき勤めふ其身分弓矢の道の秘支口傳書記たふ
一春おても猫小小判の氣きんと御扶持を受てらるる
人の世悴喜平次親と遠ひ弓筆の道も人あまきとて見合と顔と
御意小のじが不慮の御敷氣象とて別まくの風はたふら
死たあふ聞たまふとも悔んでらるる昔悲しいとも思ぬ

どもけつやう相送路ねんそ現存のこが嫁を知らぬ妻といひ
 なるら女房よ妻よと替らると思ひくせし面目なき船にさす
 歌く小ぞ扱ハ此子が祖父さゆ名別は良人のさし小爺御
 ハ無業といひ又さちらると成とも聞ると思ひあせて今迄に
 嫁ふ孫よと名乗あひかりした不孝ははひの此苦くさかろふ
 のも賤妻らと起はせめてもの罪亡くす盛長はは文忠
 さは此骸をまつこ小刺んであるとも男御の恨を晴して下され
 が軽むわらふと伏若のあははるに嫁の一言を必死に信まつ
 釵こそ又九郎兵衛が具まで小作に罪のつこのひ天通るのこ
 そじ去さうら旁の浅くぬ心底聞けけ源家の栄えのさす
 ちを見ふ此悦ひといはるるも文蔵との盛長といひ物見だん

是嫁御次の間の押込小入墨なる喜龍を見へ持参るる
 といふ小やく取出と破きさらば古皮竹籠蓋を聞けは後る
 丸木綿のつぎ切古綿小うり隠せし金子の色も瘧くそさく
 打らみつた是見らまよ又九郎兵衛が此年月始末小溜め
 墨七百兩原来某腹うらの下人うら程まで利欲小迷者
 らる神と美兵を思立あは佐殿の神為小軍用金銀をこそ
 指あくる小志くはと思ひ込た其日よと世の中の義理順義
 物の義理後生の道耳小入り目小らと始末候約小ころ
 を碎き手つり者と見込て法小過た高利の貸金目足下銭
 八割七りと十幾一の口銭肩引人の小息子部屋住の真かろ
 見殺く死一とい前月小踊あやわゆか名を付五年このか

貧乏溜ふとる思へども漸く小七百兩千兩小都合せり相果る残
 念らうと尽せぬ縁の血筋とて独りこの孫小名衆合七百兩の金
 を譲り上代への忠義を尽させ昔の武士小返と思へ祖父の
 身の本望何れ上の有へた故のひ罪苦も是限り早小此方を後
 少つて悩まじ安婆の暇をたぐひのり浅様や此年月の無
 理非道金銀の利欲小迷ひ一遍の経陀羅尼も唱へ夏も永
 き未来地獄の苦と思ひや此世小生て有うもへ始末も苦
 しむ有財餓鬼食物喰ふとて身小物著とて寢まきめあつたか
 難ハヤと直さと紅蓮大紅蓮の高利貸の火の車身
 焦と心の鬼の途崩しつゝ呵責の皆済多ん我罪業の帳目
 億万劫を経ふとて溜ふ期も有まはと懺悔の涙小むせ

まは実あとりや道理ぞと嫁ハ正体泣況み孫の大二三足ら
 小二人の勇士も心根を思ひやたふ共教とあつた悪ふと道理
 りふ文蔵国安涙をよめ鳴呼迷んはし又九郎兵衛おん身が
 利欲小ふけは主君を思ふ大善心子孫を思ひ慈愛するは
 佛果菩提の種なるかの何を伺小しむ懺悔との傳言の文蔵
 思つとあつた手小かけも前世の因縁あまを御身小るさ
 御兩所の後見七百兩の此金を仇殿へ参りて却て親子の忠
 義を立我身も忠義小三百兩の不足の金子を相との合せて
 千兩戦場の御用小立ん気遣ひ有ると凍ま六完承とら
 転母に志期の二句心根小懲りてかつけ最良此世小思ひ
 罪苦又一つとわじ御兩所御さる嫁女さる孫も早く成人と



本
家
青貝細柳
徳倉



娘
二七

青貝細柳徳倉

貝と笑うて皆く立又まゝ親父もせふ打つて一間のつらへりは
 薄墨小が玉章の便りさへ遠ざかりたるか古の霞をかた立かへる旅
 の羽折のうらまえて連の媚の女子帯真田文藏国安が気ハ安うね
 身の一分立ふ心も一重なるか帷子うせ小世を忍ぶ身男の家居ひじ
 ろと四五年も見ぬうち小めつたるをせつて等東宮の家根草うらぬ
 の此櫓と店に残りし盆山の小田原石今ふはる賣ぬものさほ
 ふやく物はし終るる足夫の色と同知るも平日小恋し念うるや門
 出る娘が顔見合して揃ふやあつてヤアおまへに文藏さほ神とま
 らそ戻つてあつてといひつ傍の小目を付てわん小御連が有そな御
 挨拶もやさいでと會釈つてつて汲て出と茶のつちの身実わい這
 方、粹み廓河文さん此御子うらまのう御咄小岡たると愛さんら
 てよいといのと茶碗取手もをばさふと娘ハ何の気もつうとを
 軽い御連さほ近付ハ後程ゆると先文藏さほ奥へこさつて爺
 さほふも逢へんせ女中様も御志趣さほ内へ入ふを是の待
 ちまき六郎大夫との小逢ぬさた小うらむさふちけと尋か夏あると茶
 店の床へ呼戻し別小気遣ある夏あはあ福と其方十二歳のじ
 某夏国を去返き最早五とせふ及ふ今日返音信をみせしれ
 咄し其方いふ不及ふ六郎大夫との小も不実なる者と思召
 き定めて外方う養子習在入らせ家業相續致さるかや
 問ひきて娘ハ恨めし小あ良人の術とも思ひさふ夏を承けり
 たとく五とせ十とを便り音信のたても外小男を持やうか
 と思ふあうら適小飯つてまて儲かるとも御言葉とまや涙くむ女

の常文蔵詞をあらためて其誠心を見ふうへ折入て頼み入たる
子細あまも此夏親父との側おてふのれさふ美又其方が身
も余程せつるは草抱ののち夏かろふと堪忍致とやと念を入
て向うけら進るまこそは姫とせのよて一度は渡ふ河原かてり
多く書を御連の女中の手前もあまも取にけし袖豊へいやくた
様からふ古又小あは先此文蔵が身のうへるうい撮んで物語ん
方に別きてるを五年以来国を往還して漸く奥筋の諸侯を奉
公してめで相立の知行をあらふ其うち小降て備たる身の雅気出
来ぬ金子三百兩を賞せざればもさかへも行かぬ夏迎頭無
念千萬のれも暫の間と思ひ締らる手越喜濃川の色里へ傾
城奉公は途良人う手話の三百兩用立れば生屋のたのなるとい

小物吐胸の顔膽の漬る驚き最なるこそ男の心中美理
を思ふ心あり頼みもきても文蔵がふんを立させよと余美もまけ小い
懸まへ傾城植女のおろろの夏あふふうへ一命かても良人のうら
ぶらうらひ更へ厭ふ心成るる様とて様くの辞宜小うて武士道も
慶ふ入沢りも様子を岡祿へ仮初小をの御受もやまほしといふ
指出る連の女我夫の口ろと御内美さゆ小手を提ての頼みは然
この支と推量して勤奉る小いて進せてたへまこそ天晴貞女あり
と答うやされて文蔵も詞の尾小つたふよとく一生の身の雅気様
子は何て有やも夫婦の美理小色里の勤進て下さまといふ
まはいな行まてはまけまども様子岡祿に心う滴ぬ早小様子を
して同話もして詮方なく何を包まん偶とせ夏も喜濃川の

宿へ通ひ初め時めく金盛の太夫を去客と張合小買論小おび
互ひよ寄ふ恋路の意根けよ此頃ハ身清の論小かつと某の手入
福ハ生死も出来ふつたつ身清の高ハ三百両さしども當分何とも
好買さる福ハ其智として其方を廓つ久置とても長う勤めを
改めと小もあつて三百両の金子調小間と暫時の辛抱救といふ連
の女も諸も小割つ口説つとせぬけと

○眼水品

女児々始終を別うてもと燃たつ悟氣の炎ら連の女胸く
ら引とへて爰女中つて凡俗なる物いさ何とも合点の行ふ
人と心を付て窺ひし借入金の咄小て六喜流川の宿小時めく全
盛の太夫との小て有るも我夫小身清を進めまづ御礼よりやぞ

わん少く番心入ちる先此話合さるると止めて貰いは何程
深き別深うりて傾城ハ廢物親のい名付有る今余枕は
かかさねども我身ハ本妻貞田文藏殿小定まふ妻の身して極女
を清出ま金の勢も傾城奉ふ得せま先を心得て下されと
腹立まの炎も色さるるの女我を折てさつても手いさどの娘御お
ほさふと思ひの外見ん覚悟氣のさるも知つて聞吉とせぬ併さ
文藏との本妻の定まふ妻と功小きても肝心の男の氣小のねハ
難那といふ夏もあまハ賤妻り悪敷夏ハは文藏とゆを大切
小お心あふ得てて廓小行傾城の勤めなされ先あつて
いふ此胸ぐら放してりなと突飛とつ小たのたを極ハ今の
いひし氣小漆のてのさる夏もあまハ腹を立かるとつくと高を



喜平次後家

文蔵いのちを
梢を傾城小

賣らんよ

真田文蔵



六郎大夫


喜平次後家

喜平次後家

の間をいかに遠くもあがなまふ小角のいへど五腕六腑小分入て見たふら如
くしいまゝを駕馬た入て文蔵を暫く答へも飽満の体連の女も與え
顔娘の梢ハ始終を問今爺様のお詞小て合点行ハ迷まらる
我身と文蔵はゆの女房よりお主のためと問て、君傾城ハ愚の
夏いりるふ夏目と厭ひせ去来廊へ行人早うのまて行てあま
とハ敵膝禪禪取捨てか、いとも小ハゆ小媚りや文蔵国安横手と
打通流石小武士の妻心危届つて過分、男殿の胸中在うた
い、疑ハ真平御免下とあへ文蔵計畧近頃疎忽の分別や
思召も恥しけきハ一とちの中分原此女中ハ源家譜代ハ下礫
の御内室不思議の縁小巡り逢い世話小致とも忠美の通三百
両の金子の才覚是なる小梢合点とハは合否とも其か版

切もろと死る系跡の号中も傾城とと瀧もあれた波風立ぬ源氏
のお為と存せしるるの此分別御老人の一言ハ梢が心も安堵とて御
至の為の傾城奉云一方うらぬ男の御息重ねて御礼小まうると
娘諸とも立出まハ文蔵御待ちやと梢も待と叫とありとて賤妻小
待と未練の御心廓小鬼が住てふじと又立出まハ而大夫押返
へ其方を傾城小賣りともとも三百両の金子あり是を見ると腰
の刀文蔵小差出果若年の昔も身を放さぬ重宝當國の
住人大場の三郎景親殿とと度小召とと今日迄放さぬは
心當の引出りの時の用ハ花聲の御辺を為小賣放ハ入用の三
百両此男清合たりと問小文蔵両手をつ久重との御情御礼
言語小尽さしととハ下礫の後家諸とも打枕ハ何さし礼を

會誓三浦與誓卷之三

多し他人向き殊更の幸ひ今日強懸の観音へ大場殿の奉詣
と聞及ひしき取も直とて観音力望のふるとに三百兩の金子
を右より左より様が餅味い物へ膏小喰へ善いさきの此の黄金
作りの一腰を袋に箱よと取納の浮世を憚り多入の人の見
目を忍小草澤の宿と栄螺の住居一方口の戸をためて我
左右を馬刀具と青貝細工の時代と心清き海蛤の娘と道
のらうと具と打つきてこそ出て行


高水與會誓

會誓三浦與誓卷之三 畢

紀伊國
高野郡
高野町
十四番地

會誓三浦與誓

大場殿の奉詣
のり
のり
のり
のり
のり
のり

たね

